

水牛通信

VOL.6 NO.7
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす
水はたがやす
牛はたがやす
稲はたがやす

芸能界周遊日記 鎌田慧 2

「スター」日記④ 坂本龍一 4

家族・友だち日々の糧④ 志沢小夜子 6

料理がすべて④ 田川律 8

本や人物往来記 笠原功三 10

たのしみがなくなった④ 高橋悠治 12

生活は歴史だ——ああ新婚 蓮沼隆夫 14

子供たち④ 柳生まち子 16

行ったり来たり④ 西山正啓 18

ねむりの森のブタ草 竹内晶子 20

最後の「ペットントン」 斎藤晴彦 22

ぼくが作った本④ 平野甲賀 24

わるいくせ④ 八巻美恵 26

下手の横吹き笛日記④ 西沢幸彦 28

友だちと吞めば本になる④ 津野海太郎 30

二点カッター 柳生弦一郎

芸能界周遊日記

5月18日 市ヶ谷。CBSソニービル。大学の同級生と会う。名刺をもらったら取締役。悠揚せまらざる人物にあっては。芸能界について教えてもらう。夜、学生時代の友人に会う。NHKのプロデューサーになっていた。やはり芸能界についてのお勉強のためである。

5月19日 市ヶ谷YWCA。三里塚廃港要求宣言の会の会合。終つてちかくの私学会館へ。このロビーで人と待ち合せたのだが、工事中で休館。出入りは、ウラオモテニカ所あつて当惑。しばしウロウロして帰るかけると、イストラム帽をかぶつて杖をついた老人に会う、その朝、突然電話をかけてきて、強引さに負けて会うことにしたのだった。用件は彼がホストをしているテレビの深夜番組への出演勧誘。中国

せている。ジャカルタ日本人学校の作文集を例にして話す。

6月6日 久しぶりに早く帰つて夕飯を食べていると、PARCから電話。自由学校の生徒たちが待っているとのこと。「授業」のことなどすっかり忘れていた。

6月7日 下北半島(青森県)の友人と池袋の喫茶店で会う。核燃料処理など原発の一貫体制がここで完成させられようとしている。十三、四年まえから反対運動をしてきたのだが、東京に住んでの「運動」は無理である。

6月9日 大阪。フェスティバルホール。美空ひばりワンマンショーの見物。場内は満員、九割方は中年婦人。「お嬢!」のかけ声とペンライトの波。圧倒されて新幹線で帰る。

6月10日 沖繩へ。私用。

6月11日 知人から沖繩戦や東京空襲など、沖繩の小出版社で発行された写真集をもらつて帰る。彼は米軍が撮

系らしい人物で、日本では安いものはず、というのをきいて成程と思つた。京都の私学の教師とかで、奇妙な人物で面白かつたが、出演は断わつた。

5月20日 京都。「スパイ容疑」で韓国政府に囚われている徐兄弟の支援集会。帰り名古屋で下車。CBSソニー主催の、大型新人歌手発掘のためのオーディションを覗いてみる。

5月21日 コロムビアレコードの宣伝担当者へ会つて取材依頼。午後、フジテレビの「笑つていいとも」の担当プロデューサーと会う。

5月22日 夜。鶴見良行さんにインタビュー。7月上旬出版する東南アジアへ進出したルポルタージュの単行本を補強するためである。

5月23日 日本テレビのディレクターと会う。編集室で、彼の教育問題のルポルタージュのビデオを見せてもらう。画が選び抜かれていてなかなかいい。そのあと、喫茶店で芸能界取材の

影した膨大な未発表写真をもっている。早く陽の目をみせる必要がある。

6月12日 四六歳の誕生日。なにごともし。

6月13日 赤坂プリンスホテルで、多岐川裕美婚約発表記者会見。テレビのカメラマンはスチールカメラマンを怒鳴りつけ、スチールカメラマンたちは、肘でどつき合う。最初から最後まで、フラッシュがたかれつ放し。舞台の効果は満点。

「婚約指輪をみせてください」
「ハイ。こちらにもください」

質問するのは、自社むけのマイクにぎりしめた芸能レポーターだけ。数のうえで圧倒的に多い活字媒体の記者たちは、そのうしろで筆記するだけ。とにかく、芸能記者会見の見物はサイコー。

6月14日 午前は新宿アルタでの「笑つていいとも」のタモリを見物。午後、日本テレビのスタジオの近藤真彦(マ

アドバイスを受ける。

5月25日 日本テレビ。「噂のスタジオ」に出演の、あのナシモトと会う。十三、四年ぶり。相変らずサービスピ精神旺盛な男である。

5月26日 遅れてしまった原稿を抱えて、終日、喫茶店を転々。

5月27日 きょうも喫茶店ジブシー。書くのが商売なのに、書く時間がすくなくすぎる。

5月30日 葛飾区職労の新入組合員教育集会。三〇分遅れて到着。午後、「ニューズウィーク」記者の取材。外人記者に日本の悪口をいうのも飽きてきた。夜、PARC自由学校。十日前

の京都の集會とおなじように若もの多く熱心。雰囲気よし。アジアに関心をもちはじめた青年たちの質の良さを賞めていた鶴見さんの話を思い出した。

6月2日 NHK高校教育用の取材。東南アジアへの進出が、子どもたちの世界でも支配と被支配の関係を拡大さ

ツチ)や研ナオコを視察。夜、TBSの「ザ・ベストテン」出演の「チエツカーズ」を鑑賞。

チエツカーズは、ベストテンにトップ以下三曲もはいついて大躍進中。局の入口には、宮崎県の看護学校の修学旅行生たちと秋田県大館市から来た生協職員の女の子たちが待っていた。せっかく東京に来たのだから誰かタレントをバードウォッチャーしたいらしい。小生には誰が誰やら識別できないのだが。彼女たちは凶鑑を丸暗気しているように詳しい。まだまだお勉強が足りない。

鎌田慧

「スター」日記

5月18日 フランス国営放送の番組撮影。歌舞伎町パチンコ屋 東口アルタ前 青山墓地前 地下鉄の中 東京タワー。夜 京王プラザで立花ハジメとAKKOのコンサートのデザイン・プランを打合わせる。

5月19日 同撮影。自宅ピアノを弾くシーン。AKKOとの連弾も。ついでに居間の模様変え。

5月20日 日曜だというのに仕事。CM撮影の為 TBS緑山スタジオへ行く。

5月21日 音響でソロの録音。NHK 401スタで「サウンド・ストリート」収録。ゲスト サンディ・アンド・サンセツ。

5月22日 音響でソロの録音。夜 帝国ホテルで「イン・ポケット」用鼎談。ゲスト、浅田彰氏。龍ははりきってし

合体番組だ。ゲスト多数 中沢新一氏 原田知世等。中沢氏とシリンに行き雑談。SとMの話。

6月4日 音響でソロの録音。赤坂で小黒氏と打合わせ。シリンで宮田氏と打合せ。しゃべると疲れる。ろれつが回らない。

6月5日 音響でソロの録音。

6月6日 レオ・ミュージックAスタ。AKKOコンサート・リハーサル。ワシントン・ホテル 朝日出版社の中野氏と打合わせ。音響でCM録音。1時間間で終わる。他人の仕事だと早い。自分のはダメ 決断力が鈍る。

6月7日 レオ・ミュージック、リハ。芝 「石川」電通 片岡氏と会食。シリ小黒氏と打合わせ。8月に10日間ブラジルに行くことになる。

6月8日 レオ・ミュージック リハ。音響でソロの録音 ドラム ユキヒロ。

6月9日 レオ・ミュージック リハ。音響でソロの録音 山下達郎が来てギ

やべる。僕は時々口をはさむぐらい。霞町シリンに流れて浅田氏と本堂の話。

5月23日 音響でソロの録音。夜 飯倉のヴォルガでデザイナーの横森さんと対談。

5月24日 音響でソロの録音。夜 スタジオを移りAKKOコンサート用テープづくり。

5月25日 音響でソロの録音。夜 テープづくり。

5月26日 音響でテープづくり。

5月27日 棚を買い 組み立てる。事務所働いている山中の子の結婚式に行く。

5月28日 朝 一度全部煙草を捨て朝食後拾って吸った。音響でテープづくり。深夜3時過ぎまで。全部で18曲あるのに未だ4曲しかできていない。どーすんの。

5月29日 音響でテープづくり。途中で他のスタジオに行きソロの録音。結

ターを弾く。

6月10日 久しぶりのOFF。

6月11日 レオ・ミュージック リハ。センチユリー・ハイアット 小黒氏 菊池武夫氏等と打合わせ。音響でソロの録音。

6月12日 レオ・ミュージック リハ。音響でソロの録音 山下達郎が来て僕は彼の声をフェアライトでサンプリング。

6月13日 レオ・ミュージック リハ。龍土町 ハナダで松浦氏と打合わせ。アメリカのTVプログラムのテーマ音楽の依頼。都美術館 明日からのパイク個展の為 準備中のパイクを訪ねる。パイクに朝鮮半島の笑いと恨を感じる。霞町 デイックスで浅田氏 義江氏と打合わせ。水牛楽団のカセット・ブックを本堂がつくる。

6月14日 事務所集合 バスで秦野市文化会館へ ゲネプロ。立花ハジメ デザインのステージがシンプルで良い。

局朝まで。

5月30日 11時、赤坂プリンス旧館 AKKOレコード発売記念コンベンション。3時 音響でソロの録音。8時 サンプラ カーラ・ブレイ。10時半 キヤピタル・ホテル、ピーターと対談。

5月31日 音響でソロの録音。夜、ギヤラリー・ワタリでナム・ジュン・パイクと会う。篠山オフィスで打合わせ。

6月7日 ひかり号で名古屋へ。AKKOコンベンション。昼過ぎ大阪へ。コンベンション。夜 東京に着く。フー。

6月2日 草月でボイスとパイクのフォーマンス。

6月3日 NHK 403スタ「サウンド・ストリート」収録。「YOU」の打合わせ。原宿、モリハナエビル5F スペースで事務所の藤井の結婚式。乾杯の音頭をとりすぐNHKに戻る。101スタ 「YOU」のリハーサル。「YOU」と「サウンド・ストリート」

6月15日 歌舞伎座 玉三郎の踊る「娘道成寺」を観る。音響でソロの録音。

6月16日 渋谷公会堂 AKKOコンサート「O・S・O・S」

6月17日 渋谷公会堂 AKKOコンサート。龍土町 インク・ステイックで打上げ。僕だけ抜け出しタモリ達の酒宴に合流 朝まで飲む。タモリは過激だなあ。あーあ今月も疲れた。ほんのちよつと人生を変えたい気分。

坂本龍一

暑気・食気あたり書記日記

六月一六日 暑い、暑い。梅雨が明けていない沖繩へ昨夜到着。時折青い空。明日からの沖繩仕事始めに先立ち、ちよっと沖繩の胃袋、平和市場へ。那覇牧志公設第一市場、沖繩女の心意気に、すっかりあてられてくみすくちんというお茶を購入、この市場を二重三重の小さい店がとりかこんでいて目を見はるばかりのうれしさ。ネーヨーさん飲んでみると、すめられたのが「ゲンマイ」と書かれた牛乳瓶に入った茶色の液体。玄米の液にしようかと蜂蜜が入っている。百円也。ドロドロと飲んでみると、さつきお茶を買ったオバさんの言葉を思い出す。

むくみをとりたいの私。おめでたですかとオバさん。太ってるだけなのよとテレ笑いのアツハハ。ふり返って

しよ。憎い発言だねー。それにしても一番困るのは、治安訓練が出来ないケイサツのエライ人だったりしてネ！
何しろ九州各県のケイサツは何やら多忙中とかで、泣く子も黙る桜田門から千人余の機動隊が、車ごとフェリでやってきたのだ。午前中の受付がほぼ終わったので、あとはローテーションを組んで傍聴してもよいことになった。今日は、日教済文学賞の受賞式というのをやるので、係の私は受賞者について段上横で待機していた。お昼はお陰でやや上等な来賓弁当というのにありついた。終ってゴミ拾いなどをして、日教済から大会に来ていた蓮沼君と那覇の国際通りやら壺屋町やら出かけ、アイスクリーム、島バナナなど食べ食べ、一路沖繩料理店へ、ここでもさんざん飲み食いして、満足の極み、何しろ暑いんだから食べておかないと身体がまいるのよときりに自己弁護。全く、デブは基から断たなきやダメ。エ

クソツと泣いた。帰りに映画を観る。イイ場面になると館内総拍手、大学の映画会みたいでワクワクする。

六月一七日 五時半起床、六時にはタクシーで宜野湾市の駐労センターへ。あやしげな天気、海をみながら、一日外へも出られず会議の手伝い。(学校種別——例えば障害児学校部、幼稚園部等の総合があった。)

六月一八日 ついに梅雨明け宣言。六時起床で、朝食をかけたみバスに乗りこむ。七時に日教組大会の会場、労働福祉センターへ。身分証明書と書記というプレートをつけて、受付へ。今日から四日間、私は大会代議員の受付オバン。右翼の諸氏、諸車はかなりのポリウムで何やらわめきたてている。勝共連合の車は、三台でずっとお経のテープを流しているから何だか寺にいるような気分でもある。

そのうち面白いことが始まった。右翼諸氏は、一人一旗、日章旗をひるが

へへ、そうは言ってもネー。

六月一九日 本格討論の始まりで、外より中の熱気がすごい。統一労組懇系——日共の影響が強いとされている県、例えば青森、埼玉、東京、京都、奈良、大阪(半分)兵庫高等々、の発言はほぼ同じトーンで、唯一たたかっているのは統一労組懇、総評など右翼再編に手をかす労組と日教組執行部は手を切りなさいと説教調。それに対してヤジ、怒号、今度は主流派が臨教審について、広範な国民の支持を得るためなどちよっといい顔をする。又もヤジと怒号、東京(高とギム制)や兵庫、大阪代議員席ではつかみ合はんばかりのケンカ。低級な国民教育プランと日教組を批難しているのは著作を何十冊も持っている労組懇系の東京代議員。思わず、低級という自分が低級なんだとヤジった。あたりからジロリいつけない。昔、ヤジリすぎて書記長からしかられたことあったのよ私。す

えしてデモ行進。何しろいつもと違うのは、遠方の地なので右翼の集まり具合が悪い、そこで一案、ハタだけ目立たせて何とか右翼の勢いというのを見せたいと考えたのかどうか、二〜三〇人が、風にハタをなびかせたというよりもっていかれるのを必死でかかえ、ヨタヨタと会場近辺をデモッている。本来デモは同じ道を行ったり来たりしてはいけないのだが、ケイサツも知らぬ顔で、デモ隊の二〜三倍はあろうかと思う機動隊が、ガツガツとハタ組についてかけている。見物人もすごくて、機動隊、右翼、見物人とそれだけでもかなりの熱気。

書記の私が朝早く起こされるのも、みーんなこの何々対策とやらのおかげ。いっそ、フェンスもとりに払い、ケイビもなくしてみたらどうだろうか、などと口走ったら、ヤーナ顔であたりの人に見られた。某新聞記者氏曰く、右翼やケイビのない大会なんて淋しいでし

ごすごと小さくなって？ 傍聴席を出た。

六月二〇日、二一日、ずっとこの四日間、右翼のお経はつづいてきた。大会場で、修正案の採決をしている、こちらの方もお経のように流れる何々修正案に賛成の方、拳手を願います、少数否決、の言葉を聞きながら、私はこうして年をとるのかと思ったり、むなしくて涙が胸をつく。今日私は三八才になった。大会の代議員はみんな原稿を手にして発言でなく読むだけ。失敗がいやなのか許さないので、管理教育の芽なんて、案外こういうところに潜んでいるなんて考えすぎかな。

労組書記、ヤクザな商売に入って三年、ついでに悪態ついて定年まで働くぞと決意した。さあて、今日は石垣島へ行って思いっきり泳ぐぞと小夜子 は出かけて行きました。

志沢小夜子

料理がすべて

〈今月の外食〉「たつ屋」(新宿) 大盛牛丼／「店名忘却」(京橋) 豚しようが焼定食／「いーはとーぼ」(下北沢) タラの芽の天ぷら、シチュー、豆腐入りカレー／「四つ屋」(四谷) 焼おにぎり、揚げ出し豆腐／「寿楽」(新宿) スタミナ飯／「壁の穴」(銀座) 若者のアイドル／「プラッサ・オンゼ」(青山) チーズ揚げ／「立田野」(青山) お雑煮／「陶玄房」いかめし、オニオン・スライス、ジャガイモ煮／「ローゼンハイム」(赤坂) ハムとアスパラのクロワッサン・サンド／「武駒」(中野) カレイ、石鯛の造り、ネギトロ、シジミ汁／「羽衣」(渋谷) パオズ／「たつ屋」(新宿) 牛丼／「二位」(渋谷) カツ丼頭別／「ぐ」(下北沢) カレー／「大勝」(築地) なかおち定食、冷奴／「盛寿司」(神田)

をたっぷり加えナスをいため、そこへ先の豚肉を加え、味噌で味つけ。⑧ペーコンとキャベツのスープ、ペーコンもキャベツもてきとうに切り、たっぷりのお湯で煮て、スープ・ストックで味つけ。⑨えび辛煮、ニンニクを刻み、ゴマ油でいため、大正えびをカラごといため、赤唐辛子を加え、塩、コショウする。これにケチャップを加えると中華風(加えなくても中華風か?)になるが、加えない方が、さっぱりとおいしい。もつともこれだと、水増し、されないで、量が少いと感ずる。⑩大根とパクチョイ(中国菜)の味噌汁、なんの変哲もない味噌汁。⑪ジャコ山椒、チリメンジャコ(なるべく乾いたもの)と山椒を煮たもの(コブ屋に売ってる)適量まぜ、焼酎、しょう油で味つけ。
へメシとメシの間に、五月二十日、牛井を食べたあとモーツァルト・サロンで、こんやく座のオペラ「ファイガロ

刺身盛合せ、にぎり／「福祿寿」(原宿) 春雨いため、牛肉細切りいため／「佳月」(下北沢) えび天ぷら、トロ刺身、鰻丼／「すずや」(新宿) えびフライ／「イラカ」(銀座) 和定食／「プチモンド」(新宿) チキン・カレー／「田村」(六本木) 枝豆、焼鳥／「おととつと」(下北沢) イワシの刺身／「二位」(渋谷) カツ丼頭別／「つな八」(新宿) 天ぷら定食／「ピテカントロプス」(原宿) まぜご飯おにぎり／「紅池」(渋谷) 刺身、すし／「一番」(渋谷) 冷し中華／「南海」(渋谷) カルビ、ミノ、キムチ／「ロツテリア」(赤坂) ハンバーガー

〈今月の自炊〉①プリ照焼き、焼酎(酒がなかった)砂糖、しょう油にプリを漬けて焼く。②コンニャクとレバーいり煮、コンニャクを千切り、レバーを切り、ニンニクを刻んで油でいためたところにはうり込み、焼酎、赤唐辛子、しょう油で味つけ。③トリ、シメジ、

の結婚」そのあとすぐに明大前キッドアイラック・ホールで豊田勇造コンサート。タンバリンを抱きながら叩いて出演。カセット・ブック制作のためのコン親会。五月二十一日、アンパン・セットとしようが焼定食の間に、映画「ダーティ・ハリー4」。五月二十二日、ヘンタイ卵焼きのあと映画「カリブの熱い夜」を観て、タラの芽の天ぷらを食べる。五月二十三日、ニンニク、ライスのと、イギリスのグループ、「トンプソン・ツインズ」を聞き、スタミナ飯をよばれる。五月二十八日、お雑煮のあとで「タニア・マリア」を聞き、いかめしを食べる。六月四日、カツ丼頭別(カツ丼のカツ+卵とご飯が別々に出てくる)を食べ、映画「サンस्पラッシュ」を見て、カレー。六月十五日、ケーキを食べて、「ローリー・アンダーソン」を見て、牛井を食べる。六月十七日、ジャコ山椒と玉ねぎの味噌汁でご飯を食べ、映画「望郷」を見て、

シイタケの煮つけ(いつものヤツ)。④アサリと中国菜のイタメモノ、ニンニクを刻み、ゴマ油でいため、そこにアサリを入れ、焼酎を加えて、ひと煮立ち、中国菜をザックリ切って加えて素早く煮る。⑤トリの白蒸し、トリ腿肉の大きいところをお湯でゆでて細く切る。しょうが、赤唐辛子、ネギをそれぞれ出来るだけ細く切り、たっぷりトリにかける。塩、コショウをして、その上からゴマ油とサラダ油をまぜたものをこれまたたっぷりフライパンで煙が出るほど熱くして、これらの上にジュウツとかける。冷たくなってもおいしい。味が薄い時は食べる時にしょう油をつけてもよし。⑥アスパラのスープ、⑤のトリむし汁をそのまま使い、アスパラを2、3センチの長さに切つて入れ、スープ・ストックで味つけ。⑦豚肉とナスの味噌いため、ニンニクを刻み、油でいため、豚肉を加える。火が通つたらいったん引きあげて、油

天ぷら定食を食べる。六月十八日ジャコ山椒でご飯を食べ、上智大学でフィリピン帰国の報告会に参加。そのまま「クセナキスのコンピュータ・ミュージック」の会を開きに渋谷・東邦生命ホールへ行き、何も食べずピテカントロプスで「ナムジュン・パイクト坂本龍一十高橋悠治」を聞きに行つたが、すごい人でもつばら楽屋にいてテレビに映るステージを見て、そのあとクセナキス、三宅榛名さんと、すしを食べ、やつとひとごちつく。六月十九日、冷し中華と焼肉の間に「クール・ランニングス」聞く。六月二十一日、二十七日。国立のマース・スタジオで連日、豊田勇造のカセット・ブックのためのレコーディングの現場監督。来る日も来る日もはっかほか弁当。シャケ弁、ノリ弁、牛井。わずかに一日小僧ずしの盛合せ。

田川律

本や人物往来記

5月21日 津野さんに20日〆切と言われていたのに書けなくて、八巻さんへ「勘弁して下さい」の電話。「じゃあ来月お待ちしてます」との返事。ホッ……という訳で、今月号から若輩ながら参加させていただく笠原(阿佐谷の書店「ブック・イン」の主人——編集部注)です。皆様よろしくお願います。

5月22日 今日火曜なので定休日。腰痛の治療と家族サービスを兼ねて、池袋のウリウ治療室へ。肝臓の腫れもひいて内臓の調整はまずまずとの由。念のためお水もとったけど大丈夫だった。「あとは死ぬ迄操体やり続けること」とウリウさんの弁。

5月25日 宮川寅雄さんの個展の最終日。仕入れを早めに済ませ、その足で上野の万葉洞へ。相当数が売れていて2階へあがると、お抹茶と和菓子や

だされた。久し振りに飲む抹茶の苦味と、宮川さんの滋味あふれる作品群。ああ、来てよかった。開店まもなく森清さんから電話。「今日やってるの」「ええ、火曜が定休日ですからやりますよ」「今、丸善なんだけど六興出版の夜の手帖がある?」「ありますよ」「じゃすぐいきますよ」

なく脾臓も腫れているらしい。「朝晩5分でもいいから操体やんなきゃダメですよ。死ぬ迄つづけなきゃ」

6月26日 午前中、中野文化センターで、土本典昭監督「海盗り」を見る。愚安亭遊佐さんをこの映画をつうじて初めて知る。

5月31日 アルバイトのあぜつさんと閉店後遅くまで話しこむ。エネルギーに満ち溢れた女性で、何のことはない、こちらが励まされてしまった。

6月27日 天気もいいし、給料日あとなのに何故か売れない。幸か不幸か仕事がかどる。明日から新しく手伝いの人がくるので落ち着かない。閉店頃、高橋さんが手伝いに来てくれる。二人で「西瓜糖」へ安田さんの写真展「記憶の旅」を見に行く。

6月1日 山内さん来店。山内さんとはミシェル・レリスの幻のアフリカ(品切本を当店で買い上げ)の出会い以来。このところ毎週のペースで恐縮してしまう。でも又来て下さい。夜、森清さんから電話。ジョージア・オキーフの映画を見てよかったとの由。

5月30日 体がガチガチで痛くて起きられず、臨時休業。電話して、午後ウリウさんに診てもらおう。肝臓だけで

6月2日 開店前に宮川さんのお宅へ配達に。その足で中野の版元へ仕入れに。夕方5時、森武さんが手伝いに来てくれた。やはり若い女性がレジにいと、ブックインとは思えない華やいた雰囲気。森清さん来店。津野さん来店「来月号からたのむね」と念押しされる。

6月3日 あぜつさんが手伝いにきてくれる。慣れないので緊張している様子。開店まもない頃の自分を思い出した。

6月4日 急ぎの常備の選択やら、新刊予約やらで遅くなり、「新文化」の原稿が書けずに、12時をまわってしまい、一時書き終えてバイクでお茶の水へ。帰り道、新宿でチャンポンを食べ、店にもどって、たまっていた仕事を済ませます。久しぶりに徹夜。

6月5日 ついつい仕事をしてしまい、一時頃店を出る。寝ずに子供たちといちご摘みに。一畝ワンシーズン五千円で借りるシステム。畑に近づくと甘いいちごの匂い。無農薬なので、とりたてをその場で頬張る感触は格別。

6月6日 しおりの刷色を決めに森清さん来店。今日は版元さんの来店が多かった。新評論の山田さん、岩崎美術社の井形さん、晶文社の手塚さん、フィルムアート社の米田さん。

6月7日 楽しみにしていた「影通信」①②号が届く(影書房刊)。仕事の合理化を考えすぎたせいか「あそび」がなくなってきた。ギスギスしがち。

6月8日 仕入れを済ませ、大平さんの個展を見にシロタ画廊へ。開店まもなく岩崎さんの奥さん来店。保育園で、昼間の園児の様子をビデオで父母にみせてくれるらしい。閉店ちかく「橋川文三研究」をもって、増井さん来店。閉店してから二人で食事をしに「ハミングバード」へ。そのうち読書会をやるうと話をやる。

6月9日 閉店後、店で今村さんとおそくまで話し込む。

6月10日 開店早々、石崎さんみえる。いつも快活な経師屋さん。はつきりしない天気。

6月11日 久し振りに、昼間に原稿を新文化にもって行く。それからみず書房へ常備のお願に行き、新婚の守田さんと、小熊さんにお会いする。

夜、諸橋大漢和定期の千葉さん来店。ここ最近、一膜かかっていて冴えないらしい。夏に梅本さんとフランスへ行く予定とのこと。ウラヤマシイ。

6月12日 定休日。昼すぎ迄ゴロゴロして、午後おそくバスで立川へ。伊勢丹で紺色の「カドラー」(西洋風おんぶひも)を買う。W・ILLという駅ビルを抜けて南口へ。階段おりるとすぐ「宝来」(台湾料理)。チマキ、ガツイタメ、ビーフン、魚のすり味揚げ、チンゲンサイを皆で囲む。

6月13日 雨の中、森清さんが大西さんを連れてきて下さる。大西さんは電話で自宅へもってる巻数を確認の上、ペンヤミン著作集(晶文社)を大量お買い上げ。「群居」を在庫していたので、いたく感激されていた様子。

笠原功三

たのしみが無い

5月17日 ヘレンデイラ〜を見る。
 5月19日 廃港要求宣言の会。二年ぶりにてみると、総会というのに10人ほど。半数がしらが頭。
 A C M Eのスライド・ホイッスル四千五百円、カラス笛九百六十円。
 5月20日 深沢小学校運動会。葉弥はリレーで優勝したので、赤組代表でカップをもらう。
 5月22日 近藤等則、渡辺香津美と「写真時代」の座談会。近藤くんがほとんどしゃべる。
 バイノーラル・マイクをかねたヘッドフォン四千九百七十円。
 5月23日 カーラ・ブレイ・バンド、五反田ユーポート。
 影だけのおんぶおぼけがいる。実体がないから、ふりおとせない。
 5月26日 クセナキスに会う。髪が

しまった。
 夜は富山妙子さんのところでへ星と風と地の闇との相談。
 6月6日 藤本和子さんの出版記念(さきまわり)パーティで、はじめて和子さんに会う。
 6月7日 戸田徹の通夜。ガンの自覚症状から一年以上もよく生きていた。最後まで医者にかからずにすんでよかった。こっちはそんなにがんばるつもりはないけれど。
 6月8日 国歌をかんがえる会。林光さんとひさしぶりに会う。
 6月9日 伊藤隆康の彫刻を聴く会、ギャレリーT O M。三宅榛名と2人でアルミ製のトゲの箱を演奏する。盲導犬が鳥笛に反応する。もう一組、吉原すみれ+山口恭範+田中賢の演奏とあわせて三回公演。
 6月10日 N O I S E公演ヘトロイメライ、丸井インテリア館。まじめそうな少年たちとちがって、少女たちは

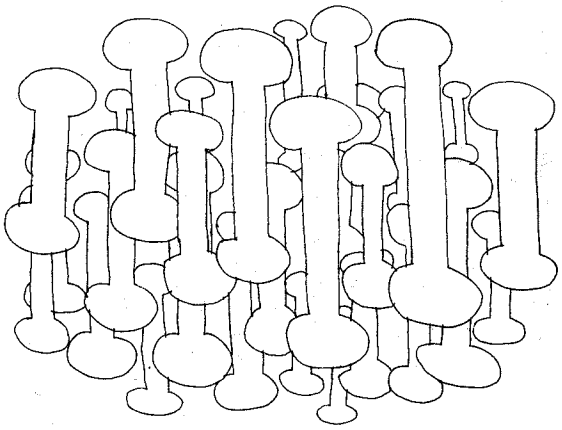
全部白くなった。一年前からはじめてたタバコを、フィルターにとどくまで吸っている。
 5月27日 早田洋子さんの会で石井かほるさんとのD U O。スタジオ一番街で二回公演。満員。83歳のおばあさんのスペイン舞踊にみんなまける。
 5月28日 ヘクセナキスとその周辺コンサート、草月会館。満員。新作のチェンバロ曲はインドネシア風地獄のタイプライター。
 5月29日 へ曲り角、中野文化センター。有料入場者二百七十六人。ゲストの森山威男がさえていた。とてつもない大きな音。
 5月30日 ホーナー・クロマティック・ハーモニカ一万二千円。単音さえ吹けない。
 5月31日 ギャルリー・ワタリの前でバイクに会う。
 佐藤紀雄リサイタル、西武劇場。レオ・ブローウエルへ黒いデカメロン〜

ふつう人をよそおったアンドロイドだった。正体をあらわしているときは共感できるが、ありきたりのセリフになると、へんに緊張してしまう。
 6月12日 戸田れい子の準太陽賞受賞式。田川ちゃんが花束をおくる。審査員が受賞者をけなすので不愉快になる。
 6月13日 葉弥12歳の誕生日。本人はとなりの家でもだちと祝っている。家ではおとなだけで祝う。
 6月14日 ナムジュン・バイク展、都美術館。夜は朝日新聞講堂でバイクと東野芳明と3人で話をする。成子に会う。
 6月16日 矢野顕子コンサートへオース・オーエス、渋谷公会堂。声がよくきこえなかった。P Aの分離がわるいのは。
 6月17日 U P I Cワークショップ最後の日。グループ作業はうまくいかなかった。結局他の4人をはじめだし

とピアソラの曲。
 6月1日 盛岡の伊藤楽器店で豊住芳三郎とD U O。《花巻農学校精神歌》、《性の魔力の歌》、《人間の努力は長続きしない》、《50億光年の子守唄》。70人ほど。
 6月2日 水沢公会堂でD U O。
 「藤はきずくと花がさく」。
 6月3日。仙台のジャズ喫茶アヴァンでD U O。本間雅夫さんがきて、二十年前の和光学園高校の教え子であった豊住と偶然の再会。よかったよかった。
 6月5日 この日からユーロスペースのU P I Cワークショップ。朝のグループは柳生弦一郎、三宅榛名、小澄孝明(柳生さんのともだちの彫刻家ていまはデザイン)、富重隆昭(ユーロスペースの人)と、知りあいをあつめて5人。ほかの4人はもう3日からやっている。終ってコーネリアとしやべっているうちに太極拳の時間がすぎて

て、ひとりではほとんどやってしまう。それが抑圧的だといって榛名はひどくおこっている。他の3人は暗い顔をして、ただそこにいる。キカイは朝から夜明けまで作業をして気がたっている。みんなを帰して、朝4時までかかった。それからコンサートの打合せ。

高橋悠治



生活は歴史だ——ああ新婚

配偶者Ⅱ起代と共にくらし始めて、三ヶ月がすぎようとしている。正式に生活する(?)とあって、荘からマンションと名のつくアパートへ移り、家具も少し増えた。でも、ほとんど全てといって良い程、持ち物に変化はない。私の断固とした私的所有物である。衆知にさらされる生活は、なんと嬉し、恥ずかしいのだろうか。こうして自分の体調と彼女のリズムとの接点を追求しようとする生活はまずスタートした。

6月某日 今日起代は、あすの日曜出勤のため代休をとる。半ドンで帰宅すると何げなく起代がペランダをさした。洗たく物がなんと干してある。洗たく当番である、「まあ、先生、お茶いかがですか、大変だったでしょう、お休みのところ」と、このくらい言うておけば長続きするかな。

テーブルの上に二枚のチケット。き

い。

私は楽しいお休みの日、先月末までにと南八ヶ岳に登ったときの作文！を依頼されていたのを延ばしてもらっている最後の約束の日である。東急ハズで買った机を愛用しようにも、もう一つパトスがでない。いつもこの調子である。チンチン電車の音にひかれて無印良品のある西友へ、壁の補修剤をかう。何度となく起代にいわれている台所の天井の壁紙のハリカエは気がすまない、序々にやろう。「おいしい生活」と名のつくものが、やたらと巷に氾濫している。それと天井の壁紙と何の関係もないのだけれども、反対にそのままの方が良いという方に傾いてしまうのは貧しい生活なのだろうか。午後、起代の働いている職場に顔をだすことにする。お互いどんな所で向をしているのかは関心があるし、それに加え、きょうはポロ市があるという降り出した雨の中を歩いていったので

のう、大学時代の同志らで発行している月刊「うんぼ」(一六〇年あんぼ斗争の頃生まれた我々が、七〇年代のいんぼ的状况をのりこえ、八〇年代を模索していく)の集りて買ったという。そういえば、チケットはいつも二枚買われるようになった。まあ、一枚ではお互いに生活を共有できないから。

さっそく、あの「風の旅団」の公演をみにいくことにした。新日本文学会の居所がわからず捜しまわった東中野である。上京して七年目の起代には、処女地であるという。線路づたいの空地になにやら泥でよされた黒テント。来るのが早かったのか、もらった整理番号は37、起代は36—これはついていないと思ったが、これが大きな誤算となる。喜んで前席におちつくところからともなくガソリンの臭い。そればかりではない、通路の横に坐った起代にはまともに、泥はとび、ツバはとび、汗はとび、そして人も跳ぶ、おまけに豚まで

時間がかかり、すでに終りかけていた。書籍部は閑散として、いつも忙しいといっている起代がふだんはほとんど身につけないスカートをはいて伝票の整理をしていた。家では頼んでも着ないのに。共に生活してからほとんどしていないパチンコは、カンがなくなってしまうていてまるで入らない。起代のサラ金・ギャンブル憎しは極端なので、きょう二千円すったことは内緒にしておこう。

6月△日 起代の大学時代の唯一の友人の結婚式。帰ってから聞くと、いつもの通りの結婚式よ」とつれない。式と名のつくものには意外と冷淡な態度を露骨にだす彼女らしい。そこがまた良いのだろう。それ以上は、沈黙をまもった。このての議論をしたら終りがなくなってしまう、お互いに関係のない話題を加え論破しようとしたすまけるものか!と思いつつ……。

結婚を祝う会は、年度末で忙しい中、

もが空をきった。とんでもない話してある。服の汚れ、部屋の汚れなどほとんど気にかけない広い気持ちの起代でさえ、激しいジャブ攻勢から身を避けるのに必死であった。ウンコと「あっそう」のおじさんがみごとに調和した劇は(恨)の文字を夜空に浮きぼりにして、三時間余りを貫徹しきった。この古いパターンが何となくなじむというのには年をとった証かもしれない。あの紅テントの血のりを思い出してしまった。起代は劇の迫力に圧倒されたらしい、「また来よう!」

6月×日 起代はいよいよ休日出勤していった。どちらか一方がふつうより早く出かける時は必ず一緒に起き、蒲団をあげるといふようになっていく。それは安っぽいいたわりなどではない、根強くはびこる単なるねたみと、貧困な日本の住居に起因している。生活するということは、けつして安易であってはならない、「新婚」も例外ではな

志沢さんと職場の湯澤くん、桜井さんが中心になりやってもらった。主役が遅れ、キャンドルが三つに割れ、「ガード下の靴磨き」というなつかしい歌まででる楽しい会であった。毎日くが、生活Ⅱ歴史である。お互いにあらゆる面で生活経験不足を実感することがある。「家の崩壊」を願う安易な家庭に入りこみつつあると思う時もしばしば。遊びにきてくれる人をまつている日々である。経験交流の場を!

蓮沼隆夫

「いちばんチビちゃんダーレ？」

突然、窓の外で子供の声がした。

「はーい」

と小さな声で返事をしてやった。

子供の時は、いつも背は大きい方だった。4月生まれだから、みんなより成長が少し早かったわけだ。大人になって、自分より小さい人にはめったにおめにかからないことに急に気がついてびっくりした。自分はチビだとはっきり納得できたのは、30才近くになっからだから、自分でもおかしい。

バスの中で、ランドセルをしょった小学生が体格くらべをしていた。少し体格のいい子だなあとは思ったけど、「私、身長153cm、体重45kg」と言う。あ、私、この子の服着られるね。

「もう寝なさい！」

いちばんチビちゃんは、ままごと遊びで子供の役らしい。子供なのに子供の役じゃつまらないね。



行ったり来たり

五月十六日 映画『海盜り』のプロデューサー・山上徹二郎が初めて日本を脱出する。つれあいの小貴子さんがアメリカの友人から招待を受け、じゃあ亭主と赤ん坊も一緒にどうぞという事になったらしい。彼にとつては映画の完成ロードショーを間近に控えていて相当？悩んだ？みたい？だったが、何年に一度あるかないかのチャンスに「背に腹は変えられず」と機上の人と相成った次第。それにしても持つべきはつれあい？ 友ですわね。うらやましい話です。

五月十七日 中野区教育委員の準公選制を映像で記録してみてもどうかという僕の提案に中野区の有志数人が集まり話し合いをする。御存知のように文部省は今年の三月、中野区に対して準公選の中止を求めた。記録映画にしたらという提案の直接のきっかけにな

ったのは、日本TVで放映されたドキュメント84をみたことだった。日本で初めて唯一の教育委員準公選制といつてもなかなかピンと来なかったのだけれど、映像を通じて実態に触れてみるとやはり文部省がケチをつけてくるだけのことはあるな、とその時思った。中野区の試みが唯一正しいなんて決して思わないが、教育委員会の活動そのものが公開を原則とし傍聴者の発言も活発に行われているその模様をみると、改めて自分の住む田無の教育委員会のことを考えてしまった。

任命制教育委員会はどこでも共通しているのだろうが、田無の場合は各政党間の取引きに依って教育委員人事が行われる。うちは教育長ポストをいいたきたい、その代り他を各政党で分け合つて下さい——とまあそんな具合らしい。活動も月に一回程度の会合でお茶をにごしているのが実情で、事務局が決めたことをそのまま承認するだけ

の委員会だといつていい。だから文部省が出す通達が何の批判もなしにそのまま各小中学校の現場に流される。教育委員会が上意下達の役目しか果してないのだから、画一化が生ずるのは無理もないと思う。

中野の場合、準公選で何が変わったのがよく言われるが、官僚主体の教育委員現場に少なくとも風穴をあけたことは確かなようだ。政府自民党がいちばん恐れるのは、教育現場にもたらされる住民の活性化状況がそのまま議会政治に波及するそのことなのではないか。つくづくそう思う。

映画づくりの方は有志みんなに思いはあるが金がない——それがこの日の結論なのでした。

五月二十三日 青年奉仕協会の斉藤信夫氏から障害者映画祭の実行委員に加わってくれないかという誘いがあった。今日はその初めての会合。映画『みちことオーサ』をつくってからこの種の

お誘いが多くなった。

五月二十五日 年に二回行われるという中野区の夜の教育委員会に出てみる。傍聴者はなんと百八十人。夜でも沼袋の地域センターに出張して行う試みだからということもあるが、それにしても立見の人で溢れた会場は熱気ムンムンだった。テーマは昨年の十二月に文部省が通達を出した「出席停止」問題。多数の子供の教育を受ける権利を確保するためには少数の子供の切捨ては校長権限でやってよろしいというのがこの通達の趣旨である。

中野区以外の教育現場にはもうすでにこの通達は行き渡っているが、中野区では半年後のいまはまだ受入れていない。親の立場、教師の立場、準公選に関心のある千葉や東久留米市、練馬などからやってきた傍聴者の反対意見が相次ぐ中で圧巻だったのは、私は命がけて毎日学校へ通っているという中学校の教師の発言だった。

「私はいま五十五才で三十年間教師をやってきました。いま私のまわりでは友人たちが次々と学校を去って行っています。昨年一年間では三人がノイローゼになって入院したり、二人が生徒に殴られています。学校を辞めると決心した途端に胃カイヨウが治ったという友人もいます。

私も年をとつたせいかも知れませんが、月曜日になると学校に行きたくなくなる。土曜日になるとほととすんです。私には忠生中の八木さんがやつた事はわかり過ぎるほど良くわかる。しかし、そんな事を言つたら教師の風上にも置けない奴だと言われるから、いつもきれいな事を言うし、それで済ませているがそれでいいんだらうか、もつと正直に教師の本音を言つたらと思わんです。

私は毎日命がけて学校に行つてゐるんです。

真面目に予習もし教えようとしてい

るのに授業を妨害されると、だからアツタマに来るんです。教師にも教える権利があるんです。

とに角、私みたいな変な教師もいるんだという事をわかつて欲しいし、いろんな事があるんだという事をわかつて上で規則をつくるならつくつて欲しい」とかくきれいな事に流れすぎる発言の中で、この人にとつてはとても勇氣のいることだったと思う。あー撮影しとけば良かったと、あとで悔まれてならなかった。

西山正啓

ねむりの森のブタ草

不思議その一。最近、とんと夢を見なくなった。友達は、夫婦のミイラを抱いてピラミッドを登る夢とか、かばに水をひっかけられて「よせよー」と言ってる夢とか、いろいろ楽しい体験談を聞かせてくれるが、私はといえば、二ヶ月程前の、西城秀樹とロミオとジュリエットを演じ、熱烈なキスシーンが幕切れとなった、あのうれしはずかし夢以来、記憶に残るものはほとんどない。年のせいではないと思いたい今日この頃です。

でも、昨夜のはバッチリ覚えているんだ。昔の片想いの君が登場するやつやっぱり相変わらず私の片想いで、扉のこつちからそつと見てるだけで胸がキュンとなった。久し振りにキュンとなって、目覚めた時、ちよつと悲しい感じがして——刺激的だった。

昔はよく、自分の見たい夢（お姫様

になる夢とか……）を絵に書いて枕元に置いてみたり、誰々の夢が見たい、見たいと念じてみたりもしたけれど、決してうまくいかなかった。そのかわりに、ドラキュラやフランケンシュタインの出るスリラーものや、犬や人を襲つちやう殺人ものを見てしまったりするものだ。そうかと思えば、昨夜のように、突然なつかしい感じがよみがえってきたりする。ああいう感じは、例えば芝居の稽古なんかで、いくら気持ちを集めて思い出そうとしても思いつかないのに、こんな風に夢の中ではあつという間にあらわれるのだから、お手あげだ。でも正直のところ、まだまだ私の胸もキュンとなるんだなつて、うれしかった。

不思議その二。来る日も来る日も、時間のある限り、いくらでもねむれる。いくらでもねむりたい。私は眠り姫かもしれない。二日間くらいなら何も食わずに眠り続けられる。機嫌の悪いと

きややりたくないことがあるときは、すぐねむれる。無理矢理起こされると、どんな時でも半日ぐらいい意識がもうろうとしている。皆に当たり散らす。ごめんない。それにしてもどうしてこんなにねむりたいの？

でも、去年の夏は異常だった。毎朝四時くらいには目がバッチリ覚めて、鼻唄まじりに庭で野良仕事。お陽様がすっかり昇る頃には汗だくで、刈った芝が山積み。二〜三週間程、苦もなく続いたのだから、私にしては、正に病気がつたと言えよう。

不思議その三。先日、いつものようにへとへとに疲れた私は、電車で熟睡中、思わずタラツとたれそうになつたよだれを、ズズツとすすりあげる音にびっくりして目を覚ました。しかし、そこではつと顔をあげたら負けだ。周囲の注目を集めないよう、そのまま寝たふりを続けていた。下を向いたままそつと目を開けると、ブラウスの胸の

あたりに小さな水たまりができていた。ふふつと気持ちで微笑んで、また臉を閉じると、突然誰かが私の左腕をつついた。それからダダダダと遠くへ走り去る足音がした。ワテンポ遅れて私が顔をあげると、あたりはいつもと同じ終電間際の酔いどれ京浜東北線の景色だった。どう見ても、よだれのおねーさんをつついて駆け出して行った子供なんかいたはずがない、いなかったよーの空気が漂っていない。ねばけてなんかいなかったんだけどなあ。本当は恥ずかしくって、目なんかギンギンに覚めちやつてたはずなのに。あのツンツンという感触と、バタバタ走りの足音は何だったのかなあ。

そう言えば、昔、古い社宅に住んでいた頃布団に横になってる私の目前を、小猫くらいのねずみが行り抜けたのを見た時、後でどんなに主張しても誰も信じてくれなかったなあ。本当だったんだけどなあ。あのコツコツという

爪が畳にひっかかる音は今でも忘れられないもの。

不思議その四。きのうの夕暮れ、電線に半透明の黄色い傘がフラフラぶらさがっているのを見た。パラソルチョコみたいでメルヘンだったと言いたいのだけれど、暮れかかった梅雨空に、お寺の三重塔みたいな建物に、電線に傘でしよ、むしろ無気味だった。あの傘が急にドカーンと大きくなって降ってきたらどうしようかと思いつながら、あんぐり口を開けてしばらくながめていた。誰がどうやってひっつけたのかな、いつまでもぶらさがってるんだろ、あの傘……。雨がたまつたら重くなつて電線がたるんじやうよ——。

子供の夢はどんなかなーと思いつつ、あつという間に今回の舞台の本番が終わってしまったけれど。こんなふうになつて起きてる時間がたくさんあると、だんだん目が覚めすぎてきて、頭がおかしくなってくる。私の夢はど

んなかなーと考えても、ほら、またすぐねむくなる、ねむくなるだけ。いっばいねむつたあとの寝起きのボーッとした時が私は一番好きだ。きつと、ねむりの森のお姫様だつて、目が覚めた時が一番幸せだつたと思うのね。

竹内晶子

最後の「ペットントント」

ひよんなことから「水牛通信」に書く羽目になってしまった。六月六日の水曜日に、藤本和子さんの「ペルーからきた私の娘」(晶文社)の完成祝いを中心とした楽しい飲み食い、神田の寿司屋の三階であって、そこには楽しい人々が沢山集って、その中に津野海太郎さんがいて、この方が、「サイト、お前、水牛通信に日記書け」と、軽卒な言葉を発したのである。軽卒な言葉には軽卒な言葉を似せて対するのが礼儀だと即座に思い、「書きます」と発しちやっ。俺の前に坐っている田川律さんが聞こえないふりなんかしてウニをつまんだりして、俺も何も言わなかったふりなんかして隣に坐っている佐伯隆幸——駒沢大学の教授になった！——にビールを注いだりしている。「ま、それはさ、書いたのをさ、見て

どと口走った。田川さんは静かに言った。「普通のこと書いて、普通のこと」そして、若い女性たちが待つ奥の方へ行ってしまった。「面白い画集があるんだ」と言って及部さんが、三嶋典東イラストレーション集・雨(岩崎美術社)——こののを見せてくれた。知らない画家だ。内容は墨で描いた雨のバリエーションだ。「いいだろう」と及部さん。「いいですねえ」と俺。本当にいいのだ。でも、常に適当なことしか他人に言っていないものだから「いいですねえ」という言い方がわざとらしい。中でも俺が好きな奴は、ペートーベンの第六シンフォニーの第五楽章みたいな雨上りとお天道様みたいな作だ。及部さんは、ナム・ジュン・パイク展の招待券もくれた。まだ行ってない。俺が件の画集に魅入っていると奥の方から津野さんが、「サイト、今月の三十日にここで会おう。原稿持って来てな」急に眠くなったから帰ることにした。

からの「はなしだな」と、一陣の寒風のように高橋悠治さんのお言葉があった。それからは酔っぱらってしまって、二次会では相変らずのワンパターンの座興をやってしまった。ふと見ると隣の隣に座っている悠治さんが俺の声に合わせて盛んにテーブルを叩いているのだ。よく見るとそれは、ピアノを弾いている手つきではないか。すっかり気を良くしてガナリ歌っているうち悠治さんの方はいつしか眠っていた。で、俺は津野さんが言ったことを忘れてしまった。この夜の出色は、デイヴ・グッドマンの名刺だった。博士・デイヴ・グッドマンと印刷されているんだわさ。これでは、はあ、まるで宮沢賢治の風景だっぺ。今時よ、ただの博士だけを枕にした名刺作るのがどこにおる？ ひろし・デイヴ・グッドマンと読まれちゃうよ。

で、六月二十五日の月曜日、俺は平

明日は朝の八時からアフレコの仕事があるんだ。平野さんは来なかった。確約はしてなかったから。

で、六月二十六日の日曜日。午前六時半起床。アフレコの仕事だ。俺はこの一年間大泉の東映東京制作所で撮っている子供向けテレビ「ペットントント」というのに出ている。そして、今日と明日のアフレコでこの番組が終了するのだ。本来はもつとつづくはずだったのだが、スポンサーの玩具メーカーが「ペットントント」という商品があんまり売れないものだから、阿呆らしくなって途中で打ち切ることになったというだけのことだ。よくあるはなしだ。しかし、この時代にアフレコなどというものがまだ存在しているという事はよくあるはなしではない。東映の悪口を言う気はさらさらないが、アフレコルームなんかひどいもんだ。壁は崩れちゃってるし防音が不完全だから外の車の音とか飛行機の音なんかガンガ

野甲賀さんと、確約はしないで、ま、飲めたら飲みましようというはなしでもって「鞆」に出掛けて行った。平野さんはいなかった。確約ではないから。奥の方に津野さんと田川さんがいた、久しぶりだった。彼らは二人の若い女性と一緒にいた。カウンタートに及部克人がいた。俺がここで及部さんと会おうのはそうそうない。及部さんの隣に腰かけてビール飲んで、肉抜き焼うどんを注文した。そしたら及部さんも注文した。田川さんがツツつとやって来て俺に原稿用紙をくれた。「月末迄に頼むでえ」「あれ？ あのはなしまだ生きてるんですか」「何云うてんのよ、今日かてTELEPHONEしたんよ」田川さんは優しいお人だから人をおどかしたりはしない。しかし俺はこんな時、常に本音とは裏腹なことを喋ってしまう変態的な性格だから、またもや「では何か昨今読んだ本の読後感なんか書いてみましようかねえ」など

ン聞こえちゃうし、それに撮影スタジオオだつていつ取り壊してもおかしくない程の廃屋に近い代物だし、要するにやる気があるという感じではない。やる気がないという感じだ。でも俺はここの仕事でおまんま食べてこれるわけだから文句はない。文句はないが力が入らない。子供向けだから子供もいる。ある時、彼らがスタジオの中を屈託なく走りまわっていて監督の話を聞いてなかったものだから、さすがの心優しい監督が怒鳴った。「お前ら、何を言われたか分ってるのか言ってみろ、小学五年の男の子役が答えた。「お前ら、何を言われたか分ってるのか言ってみろ、です」

斎藤晴彦

わるいくせ

5月17日 モンコンより手紙。秋に来日の件、OKとのこと。2月に殺されたスワンニー・スコンターのことを書いてやったのに、何ひとつ書いてない。しかし、折返し返事がきただけでもヨシとしなければ。しかたがない、会ったときにきくことにしよう。

5月23日 ブニエルの「銀河」みる。イエス・キリストが使徒たちとの会合に間にあわないので、走って辿りつき、息をきらして、おくれてすまなかつた、いま何時ですか、なんていう理解のおよばぬ映画だった。夜はカラ・ブレイバンドを満喫。

5月29日 曲角コンサート。意外と人がはいつてない。大きなコンサートホールでピアノ演奏をきく式のやりかたはもうダメなんじゃないかということかんじを強めた。これぞ、曲角では

あるまいか。

5月30日 神保町のアジア文庫に、「カラワン」鉄をうつ人」各10本とどける。ついでに「タイ国短編小説選」を三千円で購う。

5月31日 「優雅な生活が最高の復讐である」を読む。わたしの生活は優雅とはいえない。一日がアツという間にすぎる。時間の使いかたがへたくそというよりは、世の中の時間の流れについていきづらい。いっしょにあるいているときでさえ、わたしが二歩あるく間に悠治は三歩はいく。

6月1日 荻原朝美さんと巻上公一くんのファンなので「時代はサーカスの象にのって84」をみに行つた。15年前と今のテンポのちがいを強調した演出。巻上くんはふとつたみたい。

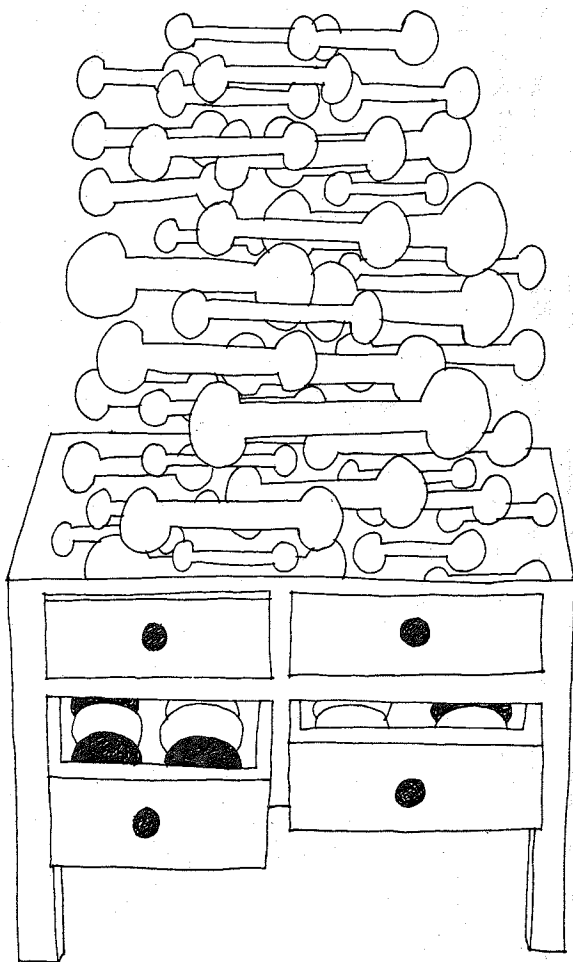
6月4日 葉弥の家庭訪問。ことは担任の斎藤先生が持ち上りのため、地区ごとに親があつまり先生を囲んで2時間ぐらい雑談。深沢小は「世田谷

イメライ」をみる。矢川澄子さんもきていて、終ってちょっとおしゃべり。

6月10日 水牛の荷造り。今月は、はやい。夕方田川編集長があらわれてうちで「自炊」。発送準備完了したところ、おもいついて田川さんに下北沢のうまいものや地図をかいてもらう。「今月の外食」も店の地図つきだと、

便利かもね。
6月14日 ユーロ・スペースによつて、UPICのワークショップをのぞき見する。悠治は毎日出勤するのはともかく、イラ立っていて感じのわるい人になっている。コンピュータをつかうことで人間はかくも迅速に荒廃するものであろうか。

八巻美恵



下手の横吹き笛日記

5月19日 三木さんのオペラ「あだ」の練習、労音会館。オペラとは実在大変なもので、特に新作の場合は、オーケストラの練習に二日、歌を合わせるのに二日、今回はダブルキヤストのためゲネプロが二回、というわけで今日から毎日練習。

5月25日 新宿文化センターで「あだ」の本番。このオペラは本邦初公開とロンドンとアメリカで大成功をおさめたとかで、大ホールが満員。何といつても二時間以上のお出し物、四、五回のリハーサルではとうてい全部を把握する事もできず、歌い手は演奏をしている間もうたっている時も、目だけはしっかりと指揮者を見ているわけで、あぶなっかしい感じ。オーケストラは歌い手に合わせるため、色々なことがおこるわけです。

5月29日 一時よりワセダアバコス

どこを演奏しているのかもわからなくなってしまう。中学校のジャックアンドベティの域を全く出ていないわけだし、まして本場の英語を聞く耳なんてものは持ちあわせていない。

6月14日 リバープールへ。英国のあり余る失業者対策の一環として向ヶ丘遊園地のおぼけのようないれものの中に各国の庭園を模して作り、その日本庭園のそばのテントの中で今回のショーは行われるわけです。街はかつて学校で習った工業都市リバープールのイメージとはおよそかけ離れた感じ。街中売家、貸家のふだばかり。ちよつと裏へ入ると、まるで映画のセットのゴーストタウン。景気の良かった百年位前から建て始め、一九七〇年にでき上った教会だけがやけにまぶしい。

6月15日 夕方ゲネプロ。大きなテナントの反対側に林英哲の和太鼓と高田みどりのパーカッション。モニターのスピーカーがあるとはいえ、残響の中

タジオで池辺さんの劇音楽の録音。七時までかかってしまつて、三宅榛名さんと高橋悠治さんのデュオコンサートの前半を聞けなかった。何といつても選曲がユニークである。セロニアス・モンクの名曲「エスピトロファイ」のジャズ風でないのりの不思議な世界、技術的に克服されていない三宅さんのオカリナ、森山さんの居心地の悪さ等どれもとっても面白かったなあ。

6月4日 一時からつづきスタジオでイギリスで行う公演のリハーサル。九時までの予定が十二時を回っている。相も変わらず、作曲者三木敏悟の筆の遅さにはあきれられる。

6月5日 今日もつづきスタジオでリハーサル。着物と生花とダンスの何とやらで、何だかよくわからない。少少企画に無理があるなあ。

6月10日 九時三十分の飛行機でイギリスへ。翌朝、くつものはけないほどふくれ上った足をひきずつて、ロンド

の音とのずれがひどい。指揮も双眼鏡でもなければ見えない程に遠い。

6月16日 ホテルでそうじのおねえさんが来たので街をブラブラ歩いて帰ってくる、相棒のアメリカ人が部屋の前で呆然と立っている。トランクの中味が部屋中に散乱している。楽器を探したが見あたらず、今日は本番はできないなとか、保険会社に連絡しなければとかいうことが頭をよぎる。ホテルのマナージャーに知らせ、警官など来て大さわぎしている時、ベッドの下からかぎのこわされたアタッシュケースに入った楽器をみつけた。結局とられたものは何もなかったのだが、ドロボーはドアに体当りか何か、ものすごい力でこわして入って来た様子。二時間のショーを二回行う。満席で、それなりにうけているようである。

6月17日 もういやだいやだ、腹なんかへらなければいいのに、いもも、肉も、なんでこんなにまずく料理でき

ンはヒースロー空港へ降りる。

6月11日 今日一日休み。ロンドン名物二階建てバスに乗って町の中心ピカデリーサーカスまでくりだす。公園が多く、思ったよりきれいな町だ。

6月12日 ロンドンのミュージシャンとはじめてのリハーサル。トランペット四人、トロンボーン三人（内一人はロスアンジェルズから）、ホルン一人、オーボエ、フルート。ホルンとオーボエとフルートはロンドンシンフォニーの人で、あとはジャズミュージシャン。全員正統的奏法で、よく合う。

6月13日 リハーサル二日目。昨日は初演で演奏していたので、ちよつと緊張していた所もあったが、今日は慣れてきたのか冗談など言いながらワイワイと練習する。演奏最中にとりなりのフルートのじいさんが話しかけてきたりする。何といつても本物の英語です。何小節かの休みの間にくるものだからヘラヘラ笑つてごまかしているうちに

できるんだらう。まずいにも腹がたつが、こんなものをおいしそうに食べているのを見ると、なお腹がたつ。この国の人は味覚というものが無いのか、味覚が違うのか、食物がのどを通る感覚と満腹感しかないのか、何なんだ！というわけで今日も二回のステージ無事終る。

6月18日 ロンドンへ帰る。ミュージカル「リトルシヨップ オブ ホラーズ」を観る。言ってることの十分の一もわからないが、コメディなので、やたらとおかしいらしく、しまいにはやけくそでみんなとっしよに笑つてみる。

6月19日 かれこれ異国で十日もすごす。少々つかれた。十数時間を飛行機の中ですごすという関門をのりきれば、もうすぐ日本だ。

西沢幸彦

友だちと呑めば本になる

東北新幹線にはじめてのつた。このたびも高平哲郎が同行。ビュッフェで立ち呑みしていると、となりにいた太ったおねえさんがビールをすすめてくれる。「どこに行くの？」ときくと、「スキヤンダルになっちゃうからさ」とおもしろく口をにごした。スキヤンダルといってもなア。とても芸能人には見えんし、いったいなにものだったのだろう。

たちまち一関につき、タクシード、「ベイシー」に直行する。土蔵を改造したジャズ喫茶で、ご主人の菅原さんはカウンント・ベイシーのただひとりの日本人の息子である。もちろん精神的な意味でだけ。

去る四月二十六日——故小野二郎の三周忌の夜、故人の義弟にあたる高平と呑んでいるところに、菅原さんから電話がかかってベイシーの死を知らされた。

れた。したがって来年からは、二郎忌は「ワン・ノックロック・ジャンプ」忌をかねる。それやこれやでベイシー本をつくらうという話になった。岩手に「ヘラメク」ということがある。あ

ることないことを素朴かつ陽気にしゃべりまくるといった意味らしい。菅原さんはこのヘラメキ人の代表のような人物だった。ベイシーにかわいがられていたという理由がよくわかった。

その夜は呑む。翌朝も呑む。ツアアの途中だという山下洋輔がつかればはてた顔であらわれる。昼の汽車で帰京。なんとか本のプランができあがったのがふしぎだ。

主として中学生向けのホコリっぽい小説シリーズをつくらうと思いつき、その相談のために田川律、江崎泰子、篠沢純太のお三人にあつまっていた。第一回だからと山の上のホテルをはりこんだら、ちよいとしたヴェルサ

イユ調の部屋が用意されていて、アワをくう。

七〇年代のなかばから、アメリカで少年少女むけのプロブレム・フィクションというジャンルがさかんになった。ローティーンの妊娠から管理教育や人種差別まで、子どもにかかわるありとあらゆるモンダイを全力投球で、そうとう質のたかい小説にしてしまうのだ。いわゆる児童文学ではない。ファンタジーやメロドラマを避け、ドロップ・アウトのすすめてもなく、それでいて実験的な調子をおとさない。そのまねをしてみたい。

大西巨人は野間宏の『真空地帯』を批判して、軍隊はその時代の制度を圧縮した空間にすぎないと主張した。学校だって同じことじゃないの。たとえ批判のためでも、いまの学校を真空地帯と断じるのはまちがってると思う。だから大西さんの『神聖喜劇』の主人公みたいにな、中学生の男の子と女の

子が暴力ではなく、超人的な記憶力かなんかを武器にして学校の管理体制をだしぬいていくツーカーイ小説とかさ……としゃべっているうちに、これは本当にいけるんじゃないかという気がしてきた。

お三人を筆頭に、有名無名を問わず、十五人ほどの書き手をあつめた。自薦他薦を歓迎する。

(江崎さんが編集事務所をはじめたときいて) 出版のしごとが経済的にきつくなるにつれて、いやおうなしに、新しいな編集事務所を下請けにつかう傾向がつかまる。しかし下請けによる本づくりというのは、どちらにとっても、あまりいい感じのものではない。そうした傾向が不可避であるならば、その先手をうって、出版社というものをいくつかの気のあったレーベルの集合体のようなものにしてしまっただろうか。この線は十分にありだと思ふ。

「新宿ね。どこで会おうか?」、粉川哲夫に、電話で。

「プリンス・ホテルのロビーのよこのとこに喫茶室があるよね。あそこでどう?」

「いいけどさ、へんなことだな」

「レコードを鳴らさないからね。話するにはいいんだよ」

といった次第で、台湾からきた観光客たちにとりかこまれて、七月にできる予定のかれの本の最後のうちあわせをおこなう。『ニューメディアの逆説』という書名をきめ、つぎに表紙の相談。

かれはナム・ジュン・パイクのヴィデオ画面をつかいたいという。担当の松原明美に交渉をたのむ。あちらはすぐに快諾してくれた。だが使用料六万。やや手にあまる。つかおうか、つかうまいか、いまはまだ考えているところ。

こないだ神戸にいった。ああ、例のプロテスタント教会ね、自由ラジオをはじめるとって? うん、集会

に呼ばれたんだけど、まずね、神さまがこのようなりつばな器械を私どもにお与えくださったことに感謝いたします、とはじまるのね。へへえ、おもしろいね。うん、やっぱり、まわりの連中を説得するには、あれをいわなくちやならないんだろうな、丘の上だからさ、教会の塔にアンテナをつけたら、二キロぐらい飛んだらいい。しかし、あなたも持続力があるね、はじめて水牛通信で自由ラジオをあつかったときから、もう三年か。いや、四年だろ。

先日、ある週刊誌に「自由ラジオは違法です」という政府広告がでていたと長田弘がおしてくれた。ミニFMならぬ自由ラジオという名称は、粉川もしくは水牛通信しかつかっていない。なかなか流布してくれないこの名称を最初にみとめてくださったのが、その筋の方がたであったとは! かれの持続力の成果と考えたい。

津野海太郎

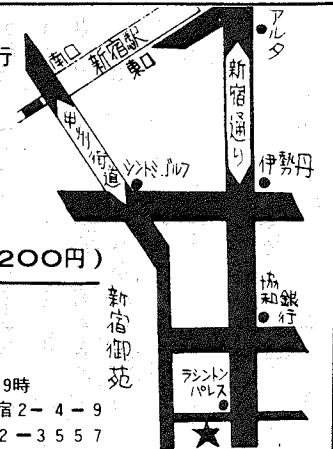
編集後記

今月もまた、肝心の時期にウロウロと関西方面に出かけたため、八巻美恵さんにオンブしてしまった。そのお礼といってはなんだが大阪・鶴橋の市場で、キムチを各種買って帰った。在日朝鮮、韓国人たちで賑うこのガド下商店街には、靴からチマ・チヨゴリ、干魚にいたるまでなんでもがあるが、圧巻はキムチ屋さん。キムチ屋、というのは何の店構えもなく、大きなホロー引きの容器を八つぐらい並べただけの店だが、この半坪ぐらいいかない「店」で、年商一億円、と近くの朝鮮に勤めている友人から聞いたことがある。白菜、大根、カブ、ゴマの葉、チャンジャ、などいづれも、飛ぶように売れる。事実オインイ。先の友人に教えて貰うまで、関西でのお土産は京都の漬物だったが、ここを見つけてからは京都はカスんでしまった。

七月十四、十五の両日、上野公園内の東京美術館講堂で「アジア・フェスティバル」が開かれる。十四日(土)は「ワークショップ」の日で水牛楽団らが出演。十五日(日)は「民衆文化運動の現在」で来日中のフィリピンのアル・サントスらが参加する。

模索舎年鑑'83 84.3.30発行

- ◎自主出版物目録
- ◎書店・スペース紹介
- ◎定期刊行物等発行者(団体)
連絡先リスト
- ◎発言-オデッサ・ひらひら
・住民図書館・ウニタ…… 700円(〒200円)



ミニコミ・自主出版物取扱書店

模索舎

〈月曜定休日〉
営業時間11時～19時
東京都新宿区新宿2-4-9
Tel 03-352-3557

* 予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座番号 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二
購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。
* 本誌は次の書店にあります。

模索舎(新宿) ☎三五二二三五五七
ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七
信愛書店(西荻窪) ☎三三三三四九六一
ワンラブブックス(下北沢) ☎四一一一八三〇二

アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
カンカンポア(西武渋谷店B館B1)
ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
名古屋ウニタ書店 ☎七三二一一三八〇

水牛通信 第六巻第七号

一九八四年七月十日
定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦
発行所 水牛編集委員会

〒154 東京都世田谷区新町2-15-3
八巻方

電話〇三(四二五)九六五八
振替口座東京四一九一七九二
印刷所 (株)トライプリントショップ